



それぞれの
仕事場

シンクタンク・ソフィアバンク 副代表
藤沢 久美

「未来は 変えることができます」

講演や執筆活動を通じて、

「個人投資は、自分が支持したいと思う企業、
社会に支持してもらいたいと思う企業に」と
提言してきた藤沢久美さん。

ビジネス番組のキャスターを務めた経験から、
「全国の中小企業やベンチャー企業に光を当てたい」と、
取材活動を続け、すでに700社を超える経営者に
出会ってきた。

自身も起業した経験から感じる現在の日本とは？
そして、いまを生き抜く元気な起業であるためには？

PROFILE ふじさわ くみ

シンクタンク・ソフィアバンク副代表、社会起業家フォーラム副代表、法政大学専門職大学院客員教授。大学卒業後、国内外の投資運用会社に勤務。1996年、日本初の投資信託評価会社を起業。同社を世界的格付け会社に売却後、シンクタンク・ソフィアバンクの設立に参加。NHK教育テレビ「21世紀ビジネス塾」のキャスターを3年間務め、その後も700人を超える経営者の取材を続ける。2007年、世界経済フォーラム(ダボス会議)ヤング・グローバル・リーダーに選出される。投資や起業、経営などに関する著書多数。近著に「脱・家族経営の心得」(幻冬舎)。

ほとんどの人が投資について 考えていないことに 疑問を感じました。



——投資運用会社に就職したきっかけは？

学生時代から実験して予測することが好きだったので、一番大きな予測という、世界の未来ですよ。それで見つけたのが、“証券アナリスト”という仕事。世界経済という大きなものを予測する仕事です。就職するまでは、一人の力では世の中は変わらないと思っていたのですが、一人1万円ずつの投資でも、それが集まるとマーケットが動くことを実感しました。

——20代で、日本初の投資信託会社を評価する会社を起業されましたね。

大学生の頃、本当に頑張った人が評価される会社を30代までに作ろうと、研究室の仲間と言っていました。ただ、どんな会社を作ればいいのかわからなくて、何か資格をと、お稽古事を通った時期もありました。けれど、そうして短期で身につけたものでビジネスといっても、とても無理な話だということがわかって、物事には蓄積が大事なんだと気づいたんです。じゃあ、いままで一番蓄積してきたものは何かと考えると、それは仕事でした。そんな時、「投資信託を評価することが急務である」という話が、大蔵省（当時）の審議会でも論議されているという記事を読んで、「私がすべきことはこれだ!」と。

——新会社は最初から順調でしたか？
いえいえ、まったく（笑）。業界の情報は、外部の者にはもらえないし、

データを得るだけでもたいへんでした。証券会社を回っても、「若造に何ができるんだ」と、信用もありません。1年目の私の年収は96万円です。それでも、私たちは世の中のためになることをしているんだと自負があり、楽しかったんです。

——軌道に乗り出したきっかけは？

当時、金融ファクシミリ新聞というのがあって、「若い人がこんな会社を立ち上げた。果たしてうまくいくのかなあ」といった記事が3行だけ載ったんです。それを見た新聞社の記者が取材に来られて、「君たちがやっていることは、いいことだ」とおっしゃって、いろんな証券会社へ取材に行き、「業界は、こういう会社を見捨てるのか」と応援してくれたんです。その新聞記事がきっかけで、テレビ番組にも取り上げられて、その翌日からどんどん電話がかかってくるようになりました。

——「世の中のために」という志が届いたんですね。その後、会社は売却されましたが。

ビジネスとして成り立つと、大手の資本が入ってくるし、外資系から一緒にやりましょうという話もあって。私たちは会社を立ち上げましたが、広げているのは資金力のあるところが仕事だと思いました。その会社に残らなかったのは、投資信託会社の評価そのものは、もう放っておいても根づいていくだろうと思ったからです。それよりも、

ほとんどの人が投資について考えていないことが問題で、自分がどう生きたいか、世界がどうなったらいいかということが、どこか他人事になっていることが気になるようになりました。会社を立ち上げたことで、未来は変えられるということをしみじみ感じましたし、これからは多くの人が未来にコミットしていけることに役立つフィールドへと仕事の軸足を移そうと思い、シンクタンク・ソフィアバンクを立ち上げるようになったんです。

——シンクタンク・ソフィアバンクはどんな会社ですか？

ネットワーク型のシンクタンクで、11人の仲間がそれぞれの分野で好きな活動をしています。世界中の社会起業家の写真を撮っているカメラマンや、ブータン王国の民主化のアドバイザーなど、活動はさまざまです。私は、講演活動や本の執筆が中心で、企業の取材を続けるうちに、気づけば、いろんな分野にもかかわるようになってきました。

——多くの経営者の方とお会いになられて、どのようなことを感じますか？

いまでも、何十年も黒字を維持している元気な企業は、地に足を付けて、物事の本質を突き詰めておられる経営者が、大切な物を守っておられます。たとえば、従業員を大切にすること。言葉では簡単ですが、従業員を大切にすることは、会社の業績に大きな波を起こさないということ。つまり、受注が増えても大きな投資はしない、受



何のために、この会社が生まれたのか、 いま、原点に戻る時期です。

注を断るなど、経営リスクにさらされないようにしているということです。といっても、守りだけではなく、景気がよくなる時に、それまで蓄積してきた資金を使って未来のために大きな投資をするなど、一歩先んじる経営をしています。そんな会社は、いまが逆にチャンスの時期を迎えていると思います。

——いま、企業が生き抜いていくために成すべきことは何でしょうか？

何のために、この会社が生まれたのか、この事業は何のためにあるのかを考える時期だと思います。それをベースに時代に合った業態や事業に変えていくことですね。

ある金属加工の企業は、「メッキとはそもそも何のためにあるのだろう」と考え、「メッキは形を変えずに性質を変えるもの」と本質を整理されたうえで、

「いまは環境の時代だから、軽いものを丈夫にすることにメッキが役立つかもしれない」と研究されて、自動車や機械の部品にメッキ技術を生かすことに成功しています。そんなふうに、いまは本質に戻り、時代に合ったものを考える時だと思います。

IT革命は第3の産業革命といわれましたが、いま時代のステージが変わろうとしている時期。けれど、根底にあるものは変わらないのですから、これまでどんなことを大切にしてきたのか、何が強みだったのかを整理して、組み替えることが必要だと思います。

——その時に大切なことは何でしょうか？

年輩の社員と若い社員がコミュニケーションをとることです。先輩方が知っている会社の本質を語るべきでしょう。

すると、その本質を若い人が現在あるいは未来に置き換えて、たとえばITを応用するなどして、時代に合った技術や用途へと広げることができると思います。

——最後に、TCMニュースの読者にメッセージをお願いします。

一番大事なのは、伝えることと聞くこと。「対話」です。そして、たとえ社員全員が真っ暗闇だと言ったとしても、そこに光が見えるといえるのが経営者。その光を少しでも明るく、大きくしていくことが経営者の役割だと思います。社員も、一人ひとりが本質を見つければ、みんな元気になれる。誰もが、いいものを持っているはず。一社として、一人として、存在価値のないものはこの世にないのですから。

取材の あとで

世界経済フォーラムのヤング・グローバル・リーダーとしての活動では、世界の「食の均衡」を図ろうと、日本政府や日本企業の社員食堂に低カロリーメニューを出し、その料金から20円ずつを食料不足の国へ送るNPO活動に取り組む藤沢さん。9月、その給食を提供しているルワンダの子どもの様子を見に行く機会があったそうだ。「日本の豊かさ、国のリーダーの大切さなど考えさせられることが多くあります」。この活動をはじめ、藤沢さんの情報はオフィシャルサイトで。

<http://kumifujisawa.jp/>

取材・構成 TCMニュース編集部

